

いわゆる宗教回帰現象の背景考

——若年層に見る「宗教ブーム」の臨床心理学的分析を中心として——

大 塚 秀 高

はじめに

周知のように一九七〇年以降、特に後半に入ってから、「宗教回帰」という用語がしばしば聞かれるようになった。宗教学及び宗教社会学はこうした現象を「第三次宗教ブーム」ないしは「第四次宗教ブーム」として位置付け（ここでいう第三次か第四次かは、幕末維新时期・終戦直後・一九七〇年代以降の三つの時期に、明治末から大正にかけての時期を加えるかの違いである）、これまでに様々な論議と分析を実施している。しかし他方には、こうした状況は一部の状況を誇張した結果であるとする反論も存在する。いずれにしても両者の見解が適切であるかどうかは今後の詳細な研究を待たねばならないが、総じて宗教が見直しの時期を迎えていることだけは間違いないだろう。確かに巷にはかつてない新しい宗教「新・新宗教」（西山茂一九七九・一九八一・一九八六）や「小さな神々」（朝日新聞社会部一九八四）の台頭を見る。そして、それらがわれわれの前に公然と姿をみせたのは先の衆議院選挙（一九九〇年）の「オーム真理教」であったことはわれわれの記憶に新しい。

こうした事態は我国のみではない。宗教復興（あたかも宗教の世俗化に反発するように）とも呼べるような事態が

世界のいたるところで起こっている。アメリカにおける保守プロテスタンティズムの台頭をはじめとして、東欧・イラン・中南米・フィリピンなどの革新運動に、各々宗教が大きな影響力を行使している節があるからである。とりわけ世界を震撼させたイスラム原理運動はその典型であろう。それではこうした「宗教回帰」あるいは「宗教ブーム」といわれる現象は現代という時代に於いていかなる意味をもっているのであろうか。

かつて、宗教社会学の領域を中心にして、宗教と社会変動の關係が一時期盛んに議論されたことがある。そこでの議論の中心は宗教が台頭してくるのは、社会が急激な変動によって、いわばアノミー状況になった場合であり、こうした社会転換期には必ず新しい宗教運動が勃発するという内容であった。しかし、この見解は一九七〇年以降の我国に於けるいわゆる「第三次宗教ブーム」を説明する場合にはいささか説得力を欠く。何故ならば、一九七〇年以降の我国の社会状況（特に八〇年代以降）は政治的にも経済的にも比較的安定をしている状態にあり、過去の第一次、第二次宗教ブームの時代や社会状況とは大きく違っているからである。また「貧・病・争」が宗教を支えているという「入信動機説」についても「社会転換説」と同様に説得力を欠いている。とりわけ貧困が宗教への入信動機であるというこれまでの見解は、世界のGNPの約一割を占める我国の豊かな社会状況下では検討の余地があるだろう。最近の見解は「科学」に対するアンチテーゼとして「宗教回帰現象」をとらえる傾向が強いが、必ずしも議論の一致を見ている訳ではない。

ところで、我国に於いて、現代をいわゆる「宗教回帰」の時代と性格づけたのは「世論調査」であることは間違いない。特にNHK放送世論調査所が昭和四十八年から五年ごとに実施した「日本人の意識調査」と統計数理研究所が昭和三十三年から五年ごとに実施した「日本人の国民性調査」がその大きな役割を担ってきたことは既に宗教社会学者の森岡清美⁵⁾氏の指摘がある。そのことはここで敢えて述べるまでもないことであるが、いわゆる「宗教回帰現象」

を支えていると世論調査が指摘する「若年層の宗教意識と行動の高まり」は、角度を変えれば別の説明も可能であり、彼らがより宗教的になっているとする見解に対しては多くの疑問が残る。

そこで、本稿では我国の七〇年代以降に見る「若年層の宗教意識と行動の高まり」について、特に時代・社会・文化と密接な関係にあるとされる神経症（ドイツ語訳のノイローゼ）の時代変遷と思春期の子供の問題行動の分析を通して若干の私見を述べてみたい。

一、いわゆる「宗教回帰」という用語

さて、我国に於いて、いわゆる「宗教回帰」という用語が用いられるようになったのは、前述したように一九七九年（昭和五十四年六月）発刊のNHK放送世論調査所の『現代日本人の意識構造』と一九八一年（昭和五十六年）実施の「日本人の宗教意識」調査以降（一九八四年五月刊『日本人の宗教意識』NHK放送世論調査所編）からである。そして、これらの調査報告書が指摘する「宗教回帰」という仮説を各種の世論調査が追随確認する形で、現代を「宗教回帰」の時代として意志統一したきらいは否めないところである。特にNHK放送世論調査所編『日本人の宗教意識』の前書きには「昭和四十八年から五年ごとに、日本人のものの考え方や感じ方の変化を明らかにするために、同じ質問を使って世論調査を行ってきました。その中で目立った変化のひとつは、人々がこの一〇年、次第に宗教に近づつたということでした。……中略……人は年をとるにつれて、宗教を身近なものに感じるようになります。しかし、ここでのいう変化とはそのような変化ではなく、たとえば、ハイティーンという同じ年令層の宗教感覚や行動を、一〇年前、五年前と比較してみても、最近のほうが宗教に近いという変化なのです。……中略……そしてこの変化は、戦後二〇年あまり続いた脱宗教的な傾向が逆転して起きた現象でした。……中略……この逆転現象が始まっ

た昭和五十年前後という時期は、戦後社会の曲り角で、オイルショックをきっかけとする経済的な大変動のすぐ後にあたります。」と、「宗教回帰現象」と時代転換とのかかわりが大きく取り上げられている。

森岡清美氏は、いわゆる「宗教回帰現象」について、先述の世論調査、特に統計数理研究所が実施した「第四、日本人の国民性」に発表されている過去五回の調査の年齢階級別分布を取り上げ、初回一九五八年調査と宗教信者比が最も減少した一九七三年調査及び逆転上昇した一九七八年の調査結果を分析し、七八年の逆転上昇は見せかけのものではないとしながらも、年齢階層が高いほど宗教信者比が高いということを明らかにするとともに、サンプルにおける高年齢者比が大であればあるほど、また若年比が小であればあるほど、その年次の宗教信者比は高くなることを指摘している。

具体的には統計数理研究所の「日本人の国民性」調査の年齢階層サンプル比を取り上げ、先に指摘した七三年の二五%から七八年の三四%への宗教信者比の反転現象の部分は、サンプル年齢の変化ではないかと推論している。つまり、「宗教回帰」の幅はみかけほど大きくない、ということである。

さらに森岡氏は、日本の経済成長期を背景に脱宗教的な傾向と「オイルショック」をきっかけとする経済的な大変動を「宗教回帰現象」の大きな背景とすることに対して、①それは一見するとかなり整合性をもっているが、それは誇張であって、実態としてみなしがたい。②日本の宗教人口の基層には顕著な時代的变化はなく、その表層において時代の社会心理的な状況に影響された起伏が生じているにすぎない。と指摘する。こうした森岡氏の指摘は正しいと思われる。

ところで、現代を「宗教回帰」の時代と各種世論調査が性格づけたのは、単に宗教信者比の増加だけではない。前掲の『日本人の宗教意識』の書きに記述されているように、それよりはむしろハイティーンという同じ年齢層の人

々の宗教感覚や行動を一〇年前、五年前と比較して見て、最近の方がより宗教に近いという変化である。しかし、NHK放送世論調査所のデータは若年層の信心や宗教行動の高まりを論証しうる調査項目とは言いがたい。放送世論調査所の調査項目は既に石井研士氏⁽⁸⁾が指摘するように「霊魂の存在を肯定する意識」「虫のしらせなどの超自然的能力の存在肯定」「UFOの存在肯定の意識」「占い行動への傾斜」等であり、若年層の宗教意識と行動の高まりは別の見方が一方で成立する。本稿もその一つにすぎない。

二、現代を「宗教回帰」の時代と根拠づけた新・新宗教の台頭

確かに森岡・石井両氏が指摘するように、いわゆる「宗教回帰」現象は誇張であって、実態としては見なしがた。我国の宗教人口の基層には顕著な時代的变化は認められない。それは従来から指摘されている我国の重層構造的な宗教現象として解釈する方が説得力をもっている。むしろその方が妥当かもしれない。しかしながら、従来の新宗教の教勢の停滞を尻目に、一九七〇年以降、雨後の竹の子の如く台頭してきた新しい新宗教があることも否めない事実である。そしてそれらが様々な社会問題を起こしたことも事実であった。「イエスの方船」の女性失踪事件をはじめとして、「真理の友教会」の集団焼身事件、「大山祇命神示教会元信者」のオカルトバラバラ事件、「エホバの証人」の輸血拒否死事件等々数え挙げればきりがない。そこには既成宗教（これまでの新興宗教を含む）が果せない何かがあるに違いない。つまり、そこには現代人、とりわけ若者を魅了する何かがあることだけは確かである。

こうした新宗教の特徴について、西山茂氏⁽⁹⁾は七〇年代以降の新宗教を「霊II術」系新宗教として位置付けて、明治以降の我国が体験した「近代化」（明治初年に始まって明治末・大正期に一段落した時期と第二次世界大戦後に始まり高度経済成長後の一九七〇年代初頭に一段落した時期）と関連させて詳しく論じている。そしてその中で、西山氏

はいわゆる新宗教（西山氏がとらえる新・新宗教と朝日新聞による小さな神々）にも教義の特徴と規模の点について若干の違いがあることを指摘する。まず両者の共通点として西山氏は、①台頭してきた時期がかなり遅く「第二の近代化」の一段落期であったこと、②大胆な霊術と奇跡の強調等によって敢えて反（脱）近代的な非合理主義を打ち出していることの二点をあげている。

また両者の相違については、①新・新宗教が伝統的な要素と現代的な要素とを、あるいは日本の素材と海外の素材とを結びつけて、新たなシンクレティクな創造を行っているのに対して、小さな神々の場合には、むしろ地方の土着的な伝統に素朴に立脚している色彩が強く、教えと実践におけるシンクレティクな創造性と体系性に欠けている。②新・新宗教の多くが、小さな神々に比べて相対的に「大きな神々」であり、信者分布の観点から見ても、かなりの程度、ローカル性を脱しているのに対して、小さな神々は、一部のものを除き、そのほとんどが零細ないしは小教団で、信者数も特定の地域内に限定されていることを指摘している。なるほど、新・新宗教の類型化としては異論を持ち得ないが、西山氏が小さな神々の特徴とする土着性については疑問がある。何故なら、ここで指摘されている土着性は我国の宗教の基層そのものであって、新宗教のみの特徴ではないからである。

いずれにしてもこうしたいわゆる新しい新宗教の構成母体、つまり教団に加入する信者が比較的若い世代である点については共通の認識がある。『読売新聞』（一九八六年三月十三日朝刊）によれば、世界真光文明教団では十～二十代の信者が全体の六割を、阿含宗の場合も三十代までの信者が三～四割を占めているという。また本稿執筆中、偶然にも「オーム真理教被害者の会」と接触を持つ機会を得たが、そこにおいても十代～三十代の若者が信者全体の中で大きな割合を占めていた。こうした新しい新宗教への若者の参加が、現代の若者を、より宗教に近いと判断する具体的な根拠として取り上げられているのである。

森岡氏⁽¹⁰⁾はこうした若年層の宗教行動に関して、我國の人口動態に見る高齢化現象からの分析を試みている。すなわち社会が高齢化すればするほど若年層に出番がなくなり、つまり疎外されてモラトリウム状況に追い込まれる。自らの運命に対するコントロール能力を超えた見通しのきかない（角度をかえれば予見できる）閉鎖状況に陥る。そこから脱出するためには、すくなくとも脱出した気分を味わうには何らかの補償行為が必要であるからだとする。西山氏⁽¹¹⁾も現代を豊かな社会の新たな貧困としてとらえ「一億総餓い殺し状況」という同様の指摘をしている。確かに高齢化社会や管理社会のもつ閉鎖性とのかわりを否定することはできないが、若年層の宗教意識と行動については、学際的観点からの詳細な分析を必要とするだろう。例えば、何故、彼らは宗教に魅せられるのか。また何故、彼らは呪術的なものに魅せられるのか。そして、その必然性は何であるのかという素朴な観点からの分析である。つまり現代の若者が示す宗教意識と行動の高まりは、単なる「神秘・呪術好き」として論じられるほど簡単な現象ではない。ここではそれを心理臨床の知見から試みて見ようと思う。具体的データは提示できないが、著者は七〇年代の後半から思春期の子供の様々な問題行動と触れる機会の仕事を行ってきたこともあり、方法としては、七〇年代以降の子供の問題行動、特に神経症の一種である対人恐怖症の変遷を通して、現代という時代の特徴を把握し、そこから現代の若者がより宗教に近づきつつあると言われる現象背景を分析してみようと思う。何故ならば、前述したように、いわゆる神経症はその時代・社会・文化を色濃く反映する問題であり、若年層の宗教意識と行動の高まりと何らかの共通項があると考えるからに他ならない。

三、神経症（対人恐怖症）の時代変遷と第三次宗教ブーム

さて、いわゆる神経症は、端的には個人の性格と個人を取り巻く環境との不適合によって発生すると言われ、精神

病とは一線を隔てる問題である。一般的にはドイツ語訳の「ノイローゼ」と呼ばれている。そしてそれは特定の人に關係なく誰しもが陥る問題であり、その時代や社会や文化と密接に關連する問題とされている。換言すれば神経症の病像（特に思春期の子供は、その発達の観点からもその影響を最も受け易い）は、その時代・社会・文化をストレートに反映しているといつても過言ではない。

対人恐怖症とは、具体的には他人と同居する場面で不当に強い不安と精神的緊張が生じ、その為に他人に輕蔑されるのではないか、嫌がられるのではと案じ、対人關係から出来るだけ身を退こうとする神経症の一種である。とりわけこの対人恐怖は日本人の精神風土（恥の文化）に親和性を持ち、外国人と比べるとわれわれ日本人（特に赤面恐怖）に好発する問題と言われて既に久しい。實際、赤面恐怖症は七〇年代以前の我國の神経症の中心を形成していた。

しかし、この日本人に好発する対人恐怖、特に日本人の典型であった、人前にでると、顔が照るなどの「赤面恐怖症」と他者と視線を合わせることができないとする「視線恐怖症」（他者に自分がどう映るかという自罰型⁽¹²⁾）が、七〇年代を境に著しい減少傾向にある。このことは各相談機關の一致した見解であり、それによって登場したのが、自分の容貌が醜いのではないか、自分の体が臭いと言われはしないかといった醜貌恐怖・異臭恐怖等（他者に疎外されているとうけとる他罰型）である。異臭恐怖は特に女子に目立つが、醜貌恐怖は男子に目立っている。それは著者の経験に於いても同様であり、従来の「羞恥型」「自罰型」は激減して、外界から脅かされているとする「他罰型」が急増している。そこには後述する我國の戦後社会に見られるわれわれ日本人の生き方と人間關係の在り方とが深く關与している。

このように八〇年代以降の対人恐怖症（特に思春期の子供の場合）は、醜貌恐怖・異臭恐怖などの他罰型がその中心を形成しつつあり、しかも精神病との境界が非常に不鮮明（定型的な神経症の範疇に入らない）な重篤のケースが

目立っている。

こうした対人恐怖症の病像変遷の背景としては、森岡・西山両氏が「宗教回帰現象」の背景として指摘するのと同様に、我国の戦後社会の状況とのかかわりを否定することはできない。しかし、何よりもそこには日本人の心性、特に日本人の志向する生き方と人間関係をめぐる葛藤が色濃く反映されていると思われる。具体的には七〇年代後半（実際に浸透したのはこの時期であろう）を境として、日本人の生き方が「全体」から「個人」へ、そして人間関係が「たて」から「よこ」へと変容（厳密には変容しつつあった）し、それをめぐる様々な葛藤が顕在化したものと考えられる。対人恐怖症の病像変化もその一つであるが、子供が示す問題行動全体も、実はこの時期を境に質の変化（かつては考えられなかった無気力症・家庭内暴力等々の問題行動）を遂げている。また若者がより宗教へ近づいていると言われたのも実はこの時期からであった。つまりそれぞれの現象は別としても、そこには発現時期と社会背景の共通性がある。しかしながら、日本人の生き方が「全体」から「個人」へ、そして人間関係が「たて」から「よこ」へと変容、或は変容しつつあることについては一考を要する。すなわちわれわれ日本人の心性が簡単に変容するとは考えられないからである。

周知のように日本人の心性については既に多角的な議論⁽¹³⁾があるが、精神分析学者の土居健郎氏は、われわれ日本人は本来的には「個」よりも「集団」（全体）を優先し、しかも集団を形成することで「個」の確立をはかる心性があり、そうした精神構造の基盤には「甘え」という独特の依存性があることを指摘している。こうした観点に立てば一九七〇年以降のわれわれ日本人の生き方と人間関係の変化は、一見、前者は「全体」から「個人」へと、そして後者は「たて」から「よこ」へと変容したかに見えるが、一方ではそれは見せかけであって、その基底は何も変化しなかった。つまりその時代・社会・文化に敏感に反応する過渡期の表層的かつ一過的な現象に過ぎないとする解釈が成

立する。著者も同じ立場である。

その是非はともかくとして、われわれ日本人は、土居氏が指摘するように、外から与えられた規範(制度)を自己の枠組として内に取り込むことで、自己確立をはかる傾向があることは否めない。裏を返せば規範が取り払われたり、急激に変化することは、われわれの存在根拠を失うことにつながる。つまり、われわれは規範や制度に従い、いやそれをむしろ自己の内面へと取り込み、それ自体があたかも「自分」であるかのように依存的に生きていたのである。

これは日本人の自我構造の特徴のひとつであるが、こうした観点に立てば我国の戦後社会は、われわれ日本人の心性に逆行する形で様々な規範や制度を解体してきた歴史でもあった。その意味では大きな変動(それがアノミー状況であるかは別としても)があったと見てよいだろう。それが最も端的に示されているのは価値観の多様化であるが、こうした規範や制度の変動はわれわれ日本人に、特に若者に強烈なインパクトを与えた。例えば、受験勉強や校則にがんじがらめに縛られていた高校時代を終えて、比較的自由な大学に入學すると、突然、混乱する者が出現するなどである。彼らはいわゆる「スチューデントアパシー」・「モラトリアム人間」と呼ばれ、あたかも宗教回帰現象と平行するかのよう⁽¹⁵⁾に発現し急増している。そしてそれは、現在では年々低年齢化傾向を示している。

四、呪術に魅せられる若者の心性特徴

現代の若者気質について、精神科医の森省二氏⁽¹⁵⁾は「現代の若者たちは、自由な雰囲気のもとで、不平、不満をあたかも自己の正当性を主張するかのように訴える。そのために、外見的には自主的で、自分の生き方をもっているかのように見えるが、必ずしもそうではない。彼らは自ら工夫して、自らの力で仕上げることはすこぶる苦手で、独創性が乏しくなっている。……中略……学校では、解答がいくつか用意されているマルチプル・チョイスの試験に慣ら

され、箇条書や図式化されたテキストで勉強してきた。このように目にみえない規範を過剰に取り込んで育った時代の若者たちは、一昔前に比べてはるかに多く、しかも堅固で、細部にわたる規範がないと、たちまちアモルフ（無定形）な世界に入り込み自己を見失う危険がある」と述べている。これは今日、学校や企業が徹底的な管理教育を若者に行う理由の一つであるが、規範（制度）の解体は同時に若者の自己概念に大きな影響を及ぼした。

人間関係の意識が「たて」から「よこ」へと変化（厳密にはそれをめぐる過渡的現象）し、親子関係や社会関係の境界が不鮮明になるにつれて、若者は自己を過大評価（本来的にはこの時期の特徴であるが）することが可能となった。すなわち自我の肥大化である。この自我の肥大化は当然の帰結として現実場面との葛藤を引き起こす。そして彼らは「自己」が傷つくことを恐れて葛藤する場面をできるだけ回避する。これはいわゆる「自己愛」的生き方である。そしてこの生き方は若者に限らず現代人に共通する行動特徴と言っても過言ではないだろう。総じて彼らは、現実との葛藤を避け、自己が傷つくことを恐れる一方で、自己を正当化するという依存性を示す。

ところで、自分本位の自己愛性格は当然のことながら他者と自分、集団と自分との深いかかわり合い（今日の対人恐怖症に特徴づけられる何者かわからぬが外界から脅かされるという不安に代表される）を持つことができない。これは対人恐怖症のみならず現代の子供が示す様々な問題行動に共通する問題でもある。自己愛性格によって発現する世界のヒズミを補償するためには、自己本位が許される世界（それは何でも良い）に一時的に身を置いて合理化しなければ自己の安定を保つことはできない。その意味では規制のない。選択自由な宗教集団が（新・新宗教教団に於ける若年信者の出入りが激しいのはこの為であろう）、とりわけ小集団の宗教が選択されやすい。

その場合の第一次的条件としては、まず自分の欲求が充足できるかどうか、或は、合致するかどうかによって宗教が選択される。つまり彼らにとっては教団理念などは二の次なのである。だからこそさまざまな宗教教団に重複的に

所属するのである。また彼らは自己欲求と合致する教団を一度選択すると、その教団（制度）そのものを自己の枠組として内面へと取り込み、それ自体があたかも「自分」であるかのように依存的になる。すなわち土居氏が指摘するわれわれ日本人の心性特徴が前面にでるのである。そして、彼らは、場合によっては教団を擁護する体制側の人間になる。つまり彼らにとつては教団との離脱は自己解体に他ならないからである。それは日本人の宗教意識と行動に共通する深層心理と何ら変わらないが、強いて彼らの特徴を上げるとすれば、肥大化した自己愛的な自己を宗教によって一体化するという側面である。その為には、特定の集団、組織を超える何者かを求めなければならない。それは何でも良いが、その点、宗教、或は宗教体験は恰好の対象として選択される。とりわけ神秘的ないしは呪術的な世界が好まれる。

ともあれ七〇年代以降の新宗教が今日に於いても教勢を伸ばしているのは、こうした現代の若者の心性を巧みに、或は直感的にとらえている一面ばかりではない。そこにはマスメディアという現代に於ける「呪術」が持つ強力な操作性と現代人のマスメディア親和性が深く関与している。そのことは別の機会に論じたい。

註

- (1) 西山茂 一九七九「新宗教の現状」『歴史公論』四四号
(特集日本人の新興宗教) 三三～三七頁
- (2) 西山茂 一九八一「現代宗教の動向と展望」『ジュリス
ト総合特集』二二号 一六三～一六九頁
- (3) 西山茂 一九八六「戦後新宗教の変容と新新宗教の台
頭」『宗務時報』七三号 一～一二頁
- (4) 朝日新聞社会部 一九八四「現代の小さな神々」朝日新
聞社
- (5) 森岡清美 一九八五、「いわゆる宗教回帰現象について」
『宗務時報』六九三～四頁
- (6) 森岡清美 前掲書 六～七頁 特にここでは年齢階級分
布と年齢階層サンプルを取り上げて次の点を指摘してい
る。

(A) 総数に於ける宗教信者比は、一九五八年には三五%であつたのが、七三年には二五%にまで低下し、七八年には三四%にまで回復した。これを年齢階層別にみると、いづれにおいても七三年の比率は五八年のそれを下廻り、七八年の比率は七三年のそれを上廻っている。しかも、七八年の比率は若年層及び近高年層において五八年のそれに匹敵するが、中高年層ではそれを下廻っている。

(B) 各年次における年齢階層間の差異に注目すると、五八年では二〇歳台の一五%から六〇歳前後の六五%まで、七三年では前者の九%から後者の五一%まで、そして七八年では前者の一八%から後者の六〇%まで、年齢階層が高まるにつれて宗教信者比が一貫して高まっている。

(C) コーホート観察を試みると、例えば、一九五八年の二〇～二九歳層は一五年後の七三年には三五～四四歳層となり、それから五年後の七八年には四〇～四九歳層となる。最初の一五年間は加齢に伴い宗教信者率は若干の上昇をみせるが、それは五八年の三五～四四歳層が示した宗教信者比には到底及ばない。ところが、つぎの五年間には著しい伸長を見せ、五八年レベルには達しなかったものの、七三年の四〇～四九歳層をはるかに抜いている。この傾向がどの年齢階層についても妥当するところに、(A)が成立する。ここでいうコーホート観察(8・

hort analysis)とは特定の年に出生した人口の全体を意味し、同時出生集団のことである。つまり、人口現象は多くの場合、年齢と共に変化するので、年齢別の分析を欠くことはできない。それと生物学的に同じ年齢であっても、社会的に異なった世代によっても微妙に異なってくるので、世代ごとに分析する必要がある。それをコーホート分析という。

(7) 森岡清美、前掲書 八～九頁

(8) 石井研士 一九八五『宗教の個人化と意味の喪失』『真理と創造』二四号 四四～五三頁

(9) 西山茂 一九八八『現代の宗教運動―(霊)術系新宗教の流行と「二つの近代化」』『現代人の宗教』有斐閣 一九二～一九三頁

(10) 森岡清美 前掲書 八～九頁

(11) 西山茂 前掲書 二〇四～二〇五頁

(12) 岩井寛 一九八五『神経症は予防できるか』『こころの科学』創刊号一〇〇～一〇六頁 日本評論社

(13) 日本人の心性については様々な分野からの多角的な研究があるが、日本人の人間関係に限定するならば中根千枝氏のタテ社会の構造と人間関係の分析がある。

(14) 土居健郎 一九七二『甘えの構造』弘文堂

(15) 森省二 一九八九『正常と異常のはざま』講談社現代新書 三四～三五